

秋晴

凄々秋日葉將疎  
氣爽雲晴対大虚  
万畝稻梁陰雨少  
田家方属歳豊初

(詠下し文)

あきばれ 秋晴  
せいせい 凄々たる 秋 日 葉將に疎ならんと、  
きさわ 気爽やかに 雲晴れ大虚に對す。  
まんぼ 万畝の 稻梁 陰雨少なり、  
でんか 田家 方に属す 歳豊の初め。

(訳文)

秋の日、寒々として木の葉も疎になりつつある、空気は爽やかで大空を見上げた。広々とした田園も、この季節は雨が少なく、これから農家はよく稔った稲の取入れが始まる。

楓林遇雨

紅楓林下興情長  
驟雨無那望渺茫  
雲晴晚来風散錦  
翩翩千点繡衣裳

(詠下し文)

ふうりんにあめにあう 楓林遇雨  
こうふう 紅風の 林下に 興情を長づ、  
しゅうう 驟雨 無那 望めば渺茫たり。  
くもは 雲晴れ 晩来 風錦を散ず、  
へんぺん 翩翩たる 千点 衣裳繡なり。

(訳文)

紅葉した林の中で風情を楽しんだ。ところが俄雨が降り出して辺りは霞んでしまったがどうしようもない。夕方から雲は晴れたが紅葉がばらばらと散って一杯に振りかかり着物が美しく刺繍したようになつた。

夜船

諷示寒風乱夜燈  
棹声驚夢客愁増  
計程独坐開篷処  
漁舸篝消日欲昇

(詠下し文)

やせん 夜船  
ふうじ 諷示 寒風 夜燈を乱し、  
たくせい 棹声 夢を驚かして 客愁を増す。  
てい 程を計り ひとり坐し 篷を開く処  
ぎよか 漁舸の 篝 消えて 日昇らんと欲す

(訳文)

音を挙げて吹く寒風が燈火を揺らしている、櫓を漕ぐ音で目が覚めたが旅の淋しさが募る。旅程を考えながら坐っていたが窓を開けると漁舟の篝火は消えても太陽が昇るところだった。

春郊曲

南郊桃李北郊桜  
来去流鶯枝上鳴  
水畔行吟停杖処  
東山西嶺晚霞横

(詠下し文)

しゅんこうのきよく 春郊曲  
なんこう 南郊の桃李 北郊の桜、  
らいきよ 来去する 流 鶯は 枝上に鳴く。  
すいはん 水畔に 吟じて行く 杖を停むる処  
とうざん 東山 西嶺に 晚霞横はる。

(訳文)

町の郊外、南の方へ桃李を北の方へ桜を見に行ったり、鶯はあっちへ行ったりこちらへ来たりして枝の上で鳴いている。水ぎわで詩を吟じながら散策し、立ち止まると、東の山も西の嶺も夕霞がかかっている。

訪唐津大夫水野君隠伏水

已避紛々一世塵  
清高当称汨羅人  
欄干況有菟川水  
双耳従来洗得新

(読み下し文)

からつたゆうみずのくんふすいにかくれたるをどう  
訪唐津大夫水野君隠伏水  
すでにさき 紛々たる 一世の塵、  
清高なること 当に汨羅の人に称う。  
欄干況や有り 菟川水、  
双耳 従来 洗い得て新たり。

(訳文)

伏見川に隠棲した唐津大夫こと水野君を訪問した。  
世俗塵界を避けて隠棲してしまつた君の清高な生き方は汨羅の渚に投身した屈原のよう。  
それに橋の下には宇治川が流れ毎日両耳を洗っているので清新だ。

故事

許由は堯帝から帝位を譲渡しようと言われ、汚らわしい事を聞いたと言つて川で耳を洗い箕山に隠棲した。

桃山即事

春色融々伏水涯  
桃花爛漫趣方佳  
可憐古墨雄図尽  
今日吟行惱客懐

(読み下し文)

もはやまそくじ 桃山即事  
しゅんしよく ゆうゆう 春色 悠々たり 伏水の涯、  
とうか らんまん 桃花 爛漫として 趣き方に佳し。  
あわべ 憐れむ可し 古墨に 雄図尽き、  
今日 吟行すれば客の懐を悩ます。

(訳文)

即興で詠詩  
伏見川辺の春景色は悠々としている  
桃花の花が咲き乱れ絶好の季節だ。  
覇権を争つた秀吉や家康のゆかりの古城も今は寂しい。吟行にやつて来た旅人(自分)の心は複雑だ。

訪僧房

春風庭上海棠低  
方丈訪来客意斎  
繩床話旧論心処  
徹耳鐘声懶返黎

(読み下し文)

しゅんふう 庭上 春風 ふき 庭上の 海棠低る、  
ほうじょう 方丈に 訪ね来る 客意斎し。  
じょうしょう 繩床 旧を話し 心を論ずる  
処、  
みみ 耳に徹する 鐘声 返黎に懶し。

(訳文)

春風が吹き渡り庭には海棠の花が垂れ下がっている。住職を訪問する人の思いは誰も同じである。繩で編んだ椅子に坐つて昔話や想いを語っていると夕日の中ゆつたりした鐘の音が聞こえてきた。(入相の鐘)

初夏雨中

炎蒸未至雨偏稠  
独酌窓前愁自休  
薄晚遶檐多点滴  
愛看庭上宿塵流

(読み下し文)

えんじょう 初夏雨中 炎蒸 未だ至らず 偏に稠し、  
ひとり酌めば 窓前に 愁ひ自ずから休む。  
ばんばん 薄晩 檐を遶り 点滴多し、  
よるこびみ 愛 看る 庭上 宿塵の流るるを。

(訳文)

雨が降り続くが未だそう蒸し暑くない。窓辺で独り酒を飲んでみると淋しさがまぎれる。夕暮れ近くなつても軒から落ちる雨垂れは止まない。そして都合よく庭に溜まっていたごみを洗い流してくれている。

川泛舟

夏日楼船泛一江  
往来傾尽一金缸  
乘醉睡眠不知返  
雨声点滴怪穿窓

(読み下し文)

かわにふねをうかぶ  
川 泛舟  
かじつ ろうせん いっこう  
夏日 楼船 一江に泛ぶ  
おうらい かたむつ  
往来 傾け尽くす 一金缸  
すい じよう すいみん  
酔に乗じて 睡眠 不返るを知らず  
うせい てんてき  
雨声 点滴して 窓を穿がつかと  
あやし  
怪む

(訳文)

夏の日、大きな舟で川遊びして杯を遣り取りして酒樽を空にした。酔い潰れて眠り込んで帰るのを忘れていると雨が降り出し窓も壊れるかと思うほど激しくなった。

海門泛舟

秋風諷蕭海門寒  
停棹唯垂一釣竿  
不厭西山含夕日  
滿藍魚得共芳餐

(読み下し文)

かいもんになふねをうかぶ  
海門 泛舟  
しゅうふう ふうしやう  
秋風 諷蕭として 海門寒し、  
さお とど たんだた  
棹を停め 唯垂る 一釣の竿。  
いと せいざん ゆうひ ふく  
不厭わず 西山の夕日を含むを、  
まんらん ぎよ え さん とも かんぼ  
満藍の 魚を得て 餐と共に芳し。

(訳文)

秋風がひょうひょうと吹く寒い河口近くの海に舟を止めて釣りをした。日が西の山に落ちるのも構わず釣つたので魚籠は一杯になるし船上の食事は美味しく両方とも上々だった。

初夏陪柘植氏佐藤氏

遊城和其一木長州墓  
尋訪元和古戰場  
長州猛威自難当  
更憐前日莅盟事  
松下今朝空断腸

(読み下し文)

しよかつげ し さとう し ばい しろ  
初夏 柘植氏と佐藤氏に陪して城に  
あそ わ そ いちぼくちやうしゆう ほか  
遊び和す 其の一木長州 の墓  
たす ほう げんわ こせんじやう  
尋ね訪ず 元和の古戰場、  
ちやうしゆうもうい おのず  
長州 猛威なれども自 から当たること難し。  
がた  
ことに 難し。  
さに あわ せんじつめい のぞみ こと  
更に 憐れむ 前日盟 に莅 し事、  
しやうか けさ むな だんちやう  
松下 今朝 空しく断腸。

(訳文)

元和の大坂城夏の陣の古戦場を訪れた。木村重成は勇猛果敢だったが、成り行きはどうしようもなかった。しかも前日の策戦会議で抜け駆けを禁じられたのは残念だ。今朝墓前の松下に立つと断腸の思いがする。

其二

宿志貴山

峻峯攀得入詩情  
投宿僧房衾席清  
短夜旅魂驚夢処  
暁鐘共聴子規声

(読み下し文)

しきざんにしゆくす  
宿志貴山  
しゅんほう のぼりえ  
峻峯 攀得て 詩情に入る、  
そうぼう とうしゆく  
僧房に 投宿 すれば 衾席 清。  
たんや りよこん ゆめ おどるところ  
短夜 旅魂 夢に驚く処、  
あかつき かね とも き しき こえ  
暁の鐘 共に聴く 子規の声

(訳文)

険しい山を登り切ると詩情が湧いて来た。僧房に泊めて貰ったが寢床は清々しく気持ち良い。夏の夜は短く夢で目覚めると暁の鐘と一緒に不如帰の声も聞こえてきた。

竜田祠

晨下山房到祠中  
儼然神像仰高風  
秋時曾賞前川錦  
室嶺今看幾株楓

(読み下し文)

竜田祠 たつたのやしほ  
山房を 晨に下りて 祠中に到る、  
儼然たる 神像に 高風を仰ぐ。  
秋時 曾て賞ぞ 前川の錦、  
室嶺に 今看る 幾株の楓。

(訳文)

朝山寺から下りて竜田大社に行つた、そして威厳のある神像を仰ぎ見た。曾て秋の日に社の前、竜田川の紅楓を見たことがあるが、今日は山の沢山の楓を賞でた。

春日祠

祠畔逍遥伴麋鹿  
鬱葱杉樹擁同垣  
血食二千有余歳  
慶沢連綿流子孫

(読み下し文)

春日祠 かすがのやしほ  
祠畔を 逍遥すれば 麋鹿ともな  
伴うあり、  
鬱葱たる 杉樹 同じく垣を擁す。  
血食 すること 二千有余歳、  
慶沢 連綿として 子孫に流る。

(訳文)

社の近くを歩くと鹿が随いてくる。杉の垣根があり、それを更にうつ蒼と茂る杉が囲んでいる。先祖(藤原氏)の祭礼は二千年以上続いていて、その恩沢は今も子孫に及んでいる。

鷲峯山

登臨鷲嶺金胎寺  
空鉢靈蹤峯最雄  
吳海茫茫浸播淡  
琶湖叡岳一眸中

(読み下し文)

鷲峯山 わしみねやま  
鷲嶺に 登臨すれば 金胎寺あり、  
空鉢 靈蹤 峯最も雄なり。  
吳海は 茫茫として 播を淡く  
浸して、  
琶湖 叡岳 一眸の中にあり。

(訳文)

鷲嶺に登ると金胎寺がある、仏道修行の靈地だったこの山が一番雄大である。遙か彼方余呉湖は辺りの木々を浸すかのようだ、琵琶湖も比叡山も一望の中だ。

笠置山

置翠巨岩城自堅  
元弘天子出征年  
可嗟恭然玉床夢  
南木良材空顕然

(読み下し文)

笠置山 かさきざん  
置翠 せる 巨岩 城自ら堅し、  
元弘 天子 出征 なされし年。  
可嗟 恭然たり 玉床の夢、  
南木 良材 顕然せるも空し。

(訳文)

鬱蒼と樹木が茂り重なり、巨岩がごろごろした堅城である。元弘元年、後醍醐帝が行幸された。畏れ多くも帝は夢のお告げによって楠木正成という名将を見出されたが、それも空しくなってしまった。

菟川浙米灘

湖水派流成一川  
本湍如矢落遥天  
南涯逕嶮消魂処  
嶂壁浚雲峯幾千

(読み下し文)

菟川浙米灘 とせんせきめなだ  
湖水より 派流れて 一川を成し、  
本湍は 遥天から 矢の落ちるが如し。  
南涯 逕嶮しく 消魂する処、  
嶂壁 浚雲の 峯幾千。

(訳文)

宇治川は琵琶湖から一つの川となつて流れ出しているが流れの中央は天から流れ落ちてくるかのように速い。南岸に見える小道は険しく迎も登れそうになくその先には雲迄届きそうな岩壁の山々が連なっている。

入讀途中作其一楠公墓

悠悠旌旆出宸京  
庶策已知天運傾  
義氣凜然如鉄石  
独伝千載不朽名

(読み下し文)

入讀途中作其一楠公墓 さんにいるところゆうのさくそのいちなんこうのはか  
悠悠として 旌旆 宸京を出ず、  
庶策に 已に知る 天運の傾けるを。  
義氣 凜然として 鉄石の如し、  
独伝 千載 不朽名。

(訳文)

悠悠と旗を靡かせて京都を出発したが献策が朝議で容れられず天運もこれ迄と覚悟した。  
楠木正成の忠義、義侠心は鉄石の如く強固で湊川で戦死したがその名前だけは永久に朽ちることはない。

須磨

繁栄二十有余年  
滅却春花寿永天  
山畔遺墟少人跡  
宮園桃李有誰憐

(読み下し文)

須磨 すま  
繁栄せしは 二十 有余年、  
滅却す 春花 寿永の天。  
山畔の 遺墟 人跡少に、  
宮園 に 桃李あれども 誰か  
憐れむこと有らん。

(訳文)

平氏が栄華を誇ったのは僅か二十年余りで寿永三年の春には滅亡してしまつた。鉢伏山裾の敦盛の遺跡は訪れる人も少なく、彼を祀る須磨寺に桃李の花を愛でに來ても彼の死を悼む人はいない。

舞妓浜

白沙如濯露濃々  
一里蒼松鬱万重  
若使秦皇觀此趣  
垂恩何限大夫封

(読み下し文)

舞妓浜 まいこはま  
白沙 濯 如く 露濃々 たり、  
一里の 蒼松 鬱として万重。  
若し秦皇をして 此の趣を、  
觀せ使むるれば 垂恩 大夫の封  
と何ぞ限らん。

(訳文)

海岸の砂は露で洗ったかのようつややかで、うつ蒼と茂る松が重なり合つて一里ほど続いている。もし、秦の始皇帝がこの光景を見たなら五大夫どころかもっと高位に就けたらう。  
故事(松の別名「五大夫」)  
秦の始皇帝は帝位就任の儀式を泰山頂上で行い神祀りをしたが突然の大いに遭い大きな松の下に入り雨を避けた。そしてその松に五大夫の位を与えた。

柿本窟（人丸神社）

唯知千古國詩仙  
曉霧孤吟赤浦天  
今日祠前訪來処  
一帆風去望蕭然

（読み下し文）

柿本窟 かきもとひまらう  
ただし せんご 唯知る 千古 國詩仙たるを、  
ぎようむ こぎん 曉霧に 孤吟す 赤浦の天。  
こんにち しぜん 今日の 祠前 訪い來る処、  
いっばん かぜ 一帆 風とともに去りて 望めば  
しょうぜん のぞ 蕭然 たり。

（訳文）

柿本人丸は千年来和歌の神様として知られている。朝霧のまだ晴れない明石の海岸で空に向かって独り詩を吟じた。今日神社に来ると海に帆掛け船が一つ出ていたが風が出てきたので居なくなり淋しくなった。

尾上祠（尾上神社）

同根松化白頭人  
清操長占千古春  
鐘声律苦東風浄  
掃尽雌雄樹下塵

（読み下し文）

尾上祠 おのえのほら  
どうこん まつか 同根の 松は化す 白頭の人、  
せいそう とし 清操 長へに占む 千古の春。  
しょうせい りつく 鐘声の 律苦に 東風浄なり、  
はいつ しゆう 掃き尽くす 雌雄 樹下の塵。

（訳文）

白髪の時と姥は一本の夫婦松の化身で千年もの昔から清掃を続けている。丁寧な打つ鐘の音が聞こえて来、春風が清々しい。そして夫婦松の下は綺麗に掃かれて塵一つない。

石室祠（生石神社）

播陽名区孰手雄  
天造何疑石室工  
樹密窟廊千歳古  
能教行客醉春風

（読み下し文）

石室祠 せきしつのはら  
ばんよう めいく 播陽の 名区 孰の手か  
ゆう じゆく 雄なる、  
てん なん 天の造りたまひしこと 何ぞ疑わん  
せきしつ こう 石室の工に。  
じゆみつ びようろう 樹密に 窟廊 千歳古び、  
能く行客をして 春風に酔は 教む

（訳文）

播磨の名所この石の宝殿は一体どんな名手が造ったんだろう。細工の腕前は天地創造の神が造ったのではと疑わざるを得ない。鬱蒼と木が茂り宝殿は千年以上古びて、春風も心地よく訪れる人をうっとりさせる。

曾根松

菅窟蟠松久聞名  
千年偃蓋正縦横  
老幹憐見新枯半  
垂影猶能期後栄

（読み下し文）

曾根の松 そねまつ  
かんびよう ぼんまつ 菅窟の 蟠松 名を聞くこと久し、  
せんねん えんがい 千年の 偃蓋 正に縦横。  
ろうかん あわ 老幹 憐れみて見る 新枯半ばする  
を、影を垂れて 猶能く後栄を期す。

（訳文）

菅公を祀るお宮の松の事は昔から聞いていた。千年を経て掩いかぶさるように広く高く茂っている。惜しい事に半分枯れた所があるが今からまた元気になって名を残して欲しい。（これからも立派な人が出る事を期待する）

小豆洲在讚東海中巨島也逆風泊干此而上山大悲閣

孤島応憐春風奇  
登臨絶岳渺天涯  
繫船幽処将題賦  
無奈棹人促解期

(読み下し文)

小豆洲在讚東海中巨島也  
逆風泊干此而上山大悲閣

孤島 応に憐れむべし 春風の奇  
なるを、絶岳に 登臨すれば 天涯  
渺たり。船を幽処に 繫ぎ 題を  
賦さんと将す、 無奈 棹人  
解期を促すを。

小豆島は讚岐の東の海にある大きな島逆風のため此処に停泊・・・

(訳文)

島の素晴らしい春景色を賞でよう  
と険しい山を登ると遙か天の涯まで  
見える。舟を静かに留めておいて詩を  
作ろうとしたら風向きが良くなり船  
頭が出帆だというのでどうしようも  
ない。

屋島

玉輦西巡恢復難  
何凶辺地没衣冠  
里人指示行宮趾  
潮水滔々浦色寒

(読み下し文)

屋島

玉輦 西巡すれども 恢復する  
こと難し、 何ぞ凶らん 辺地に  
衣冠を没すとは。  
里人 指示す 行宮の趾、  
潮水 滔々として 浦色寒し。

(訳文)

安徳天皇を奉載して四国を一巡し  
態勢を整えたが頓勢は挽回できず思  
いがけすこの辺境地で多くの高官を  
失った。土地の人の案内で行宮趾を訪  
れると一丁満潮だったが浦の景色は  
寒々としていた。

象頭山

攀躋磴道望崔嵬  
玉殿紺園映雲開  
疑是普賢飛錫杖  
象頭山上正徘徊

(読み下し文)

象頭山(印度、伽耶山西方の山。  
成道間もない釈尊が説法した。四国、  
金毘羅山)

磴の道を 攀躋す 崔嵬を望む、  
玉殿 紺園 雲に映じて開く。  
疑 是 普賢の錫杖 を飛ばす  
かと、  
象頭 山上 正に徘徊す。

(訳文)

舗道を登ると岩山が見えた。立派な  
建物や美しい境内が雲を背景にして  
映える。此処がかの普賢菩薩が修行さ  
れた地かと思い、自分も謙虚な気持ち  
で象頭山上を廻った。

塩飢海季春望夜舟涉海

已辞南海指山陽  
諸島如描正渺茫  
帰思頻催篷底夢  
月輪不是照他郷

(読み下し文)

塩飢海季春望夜舟涉海

已に 南海を 辞し 山陽に向かう、  
諸島 描くが如く 正に 渺茫 たる  
り。  
帰思 頻に催す 篷底の夢、  
月輪 不是 他郷を照らす。

(訳文)

四国側の港を出て山陽へ向かうと  
広々として沢山の島が絵に描いたよ  
うだ。家に帰りたくなって船底の夢に  
も出てくる。ところが目覚めて外を見  
ると月が照らしているのは故郷では  
なく異郷だ。